

# 方言は絶滅するのか

～方言をのこすためにすべきこと～

## I はじめに

最近、テレビ番組等で「方言」について特集されたものを見かける。東京で暮らす私たちにはあまり身近に感じられないが、その土地の歴史や生活などに根づいた話しことばである方言は非常に興味深い。以前から私は同じ日本語であるのに異なった表現方法が地域によって存在するのを不思議に思っていた。東京で暮らす私たちには、方言が各地に存在するのは知っているが身の回りで耳にする機会は少ないという人が多いと思う。そこで、これから方言は絶滅するのではないかという仮説を立てて調査し、それのこれからについて考察することにした。本論文では、普段意識しないが東京にも存在する方言や周辺各地の方言を紹介し（第II章）、現在私たちが普段使用する標準語・共通語が広まった歴史と全国的な傾向の調査を行い（第III章）、人々の方言に対する意識を、時代背景などから解明し（第IV章）、現在使われているのはどのような方言であるのかを考え（第V章）、以上よりこれからの方言のたどる道や、方言に対する人々の理想的な接し方について考察する（第VI章）。

## II 全国各地に存在する方言

### (1) 東京都の方言

まずは、多摩地域で使用される多摩弁に焦点を当ててみる。多摩弁の具体的な表現には次のようなものがある。「硬い」を表す「コワイ」。「今日のご飯はこわいなあ」というように使うらしい。「うらやましがる」時に使う「ケナルガル<sup>1</sup>」。あまり身近な表現が多くないようにも感じるが、実は多摩弁の中には現代の若者ことばの語源となったものが存在する。それは、標準語・共通語の「うつつしい」の意味を表す「ウザッタイ<sup>2</sup>」という言葉である。これはもともと老年層が使っていたことばであったが東京の若い人々の表現に取り込まれ、現在でも口にすることがある「ウザイ」の語源となった。このように方言は現代の人々の使う言語にも影響を与えている、実は身近なものなのだ。

### (2) 青森県の方言

青森県は本州の最北に位置し、中央から距離がある。そのため、共通語の影響を受けることが少なく、特色のある方言が数多く残っている。青森県には大きく分けて

図1



(“ああああおもりっていいなあとつぶやいてしまう本” 政策・青森県企画制作部企画調整課)

<sup>1</sup> 平井英次『多摩の方言と随想 第一編』（武蔵書房 1978年 p.221）

<sup>2</sup> 同上（p.183）

「南部弁」「津軽弁」の二つの方言がある。明治の新政により青森県は一つの県となり南部と津軽が統合されたが人々の意識の中にはお互い対抗心を持ち、親近感が希薄なところがあるようだ。同じ県内でもこの二つの方言は驚くほど違いがみられる。例えば、南部弁の「わがんね」（図1）。年配者を中心に頻繁に使われる表現で「だめ」の意味である。この表現は津軽では使われない。一方、津軽弁には「ありがたくて、あなたに申し訳ない」という意味の「めいわ（や）ぐ」（図2）というものがある。南部には存在しないため間違えて「迷惑」と受け取ってしまうことがあるそうだ。同じ県民でも会話が成立しないことがあるというのは非常に面白い。青森県が行った県民アンケートでは住んでいる地域の方言が好きだと83%の人が答えたそうだ<sup>3</sup>。県民の、方言を大切に、誇りに思う気持ちが伝わってくる。

図2



（“ああああおもりっていいなあとつぶやいてしまう本” 政策・青森県企画制作部企画調整課  
作部企画調整課）

### (3) 関西地方の方言

大阪の方言と言えば、断定の語尾に「～や<sup>4</sup>」とつくものや、「いらっしゃい」を表す「オイデヤス・オコシヤス<sup>5</sup>」、「ありがとう」を表す「オーキニ<sup>6</sup>」など、温かく思いやりのある雰囲気を感じられるものが多い。最近では、関西の出身でなくても、「なんでやねん！」と関西弁でつつこむといった、「方言コスプレ<sup>7</sup>」が若い世代に多く見受けられるそうだ。関西弁に限ったことではないが、その方言を使う地域のイメージを自分のキャラクターとして演出するというものだ。本来の方言の使われ方とは異なるものの、興味深い現象である。

## III 進んできた標準語・共通語化

### (1) 標準語<sup>8</sup>・共通語<sup>9</sup>化の歴史

1869年の東京遷都により、東京は近代国家日本の首都として政治・経済・文化の実質的な中心地となった。政府は中央集権国家として政治的社会的に全国的な統一を図った。このような明治の社会情勢は、必然的に国家語の確立、全国のことばの統一化といった政策を求めた<sup>10</sup>。そこで、首都である東京のことば（当時の江戸のことば）に、上方のことばの要素が上品な表現形式に取り入れられ、知識階級の使用語の採用や文章語の採用などが加わって、在来の江戸語とは異なる東京語が形成された。そして、この言語は新しい時代のことばとして標準語としての勢力を得た。

<sup>3</sup> “ああああおもりっていいなあとつぶやいてしまう本” 政策・青森県企画制作部企画調整課

<sup>4</sup> 堀井令以知『大阪ことば辞典』（東京堂出版 1995年 p.181）

<sup>5</sup> 同上（p.58）

<sup>6</sup> 同上（p.59）

<sup>7</sup> 田中ゆかり『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』（岩波書店、2011年）

<sup>8</sup> 日本では、明治の時代に唯一の規範となる言語として出てきたもの。

<sup>9</sup> 異なった方言を話す人々の間で使われ、コミュニケーションの重要な役割を果たす言語のこと。

<sup>10</sup> 徳川宗賢『日本の方言地図』（中央公論社 1979年 p.201）

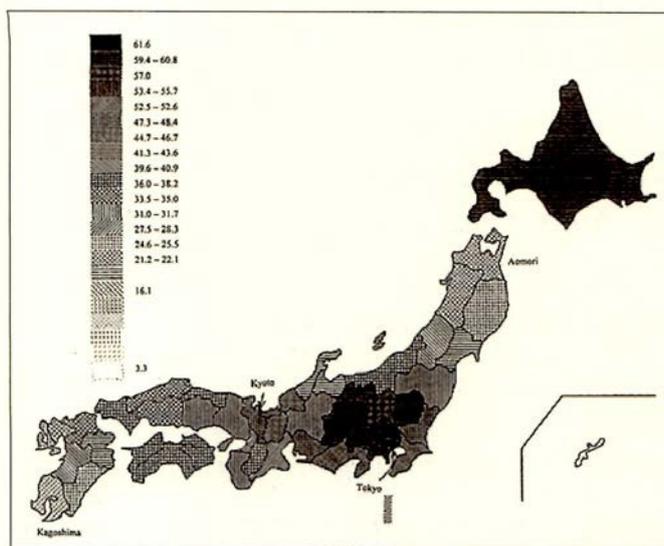
明治維新のあと、しばらくたってから方言撲滅の時代が始まる。日本政府は、学校教育を普及させ、全国民に「日本国民だ」という意識を与えるために標準語を教えた。標準語の時代には、方言を撲滅して、そのかわりに標準語だけを使わせようとした<sup>11</sup>。これにより、方言の価値評価は完全にマイナスになってしまった。しかし、この当時の人々の使用する機会は方言の方が多く、地方の人々は方言だけを使っていたようだ。戦後、学校教育・国語教育の世界で「標準語」ということばをやめて、「共通語」とおきかえるようにした。そこから、共通語の時代が始まった。その時には、方言の価値評価は中立となり、共通語と方言の両方使えばいいという考え方になった<sup>12</sup>。

東京語は、江戸弁→東京弁→東京語への変遷のうちに、文章語となり、各地方言語ともほどほどに溶け合いながら、全国の標準語としての地位も確たるものにしていった。平成の今、標準語でも共通語でもない、東京の話しことばがテレビなどを通じて普及しつつある。現在、アナウンサーたちは、「全国共通語」のより良い姿を探求しながら、日本語の改良を行っている。

## (2) 標準語・共通語化の全国的な傾向

社会の変化とともに地域のことばも変化した。その中で最も大きな変化が方言の共通語化である。図3は『日本言語地図』(LAJ<sup>13</sup>) 82項目の標準語形の使用率を県別に出したものである。標準語形使用率が最も高いのは東京の約60%で、東京から離れるに従って標準語形使用率が下がっており、青森県や宮崎県は21.2~22.1%、鹿児島県は16.1%、沖縄県は3.3%となっている。図3の色の濃淡を山の高さで表したのが図4である。この図では、京都にも小さなピークが来ていることがわかりやすい。LAJの調査が行われたのが1957~1964年であるから、この時期には東京や京都からの距離によって、標準語化の程度に地域差があったのがわかる。ところが最近、同じ項目を中学生で調査したデータが図5である。この図によると、東京や京都からの距離に関係なく、どこでも標準語形使用率が80%を超えていることが見て取れる。標準語・共通語は昔では中心地(古い時代は京都、新しい時代は東京)から波のように広がっていったが、現代では学校教育の普及やマス・メディアの発達で空から降ってくるように全国に伝わるようになった。ことばの伝わる経路の変化に伴い、各地の標準語化の状況も大きく変化したのだ。

図3



標準語形82項目の県別平均値

(井上史雄2007, 143頁)

(河西データ総合地図、鏡水兼貴)

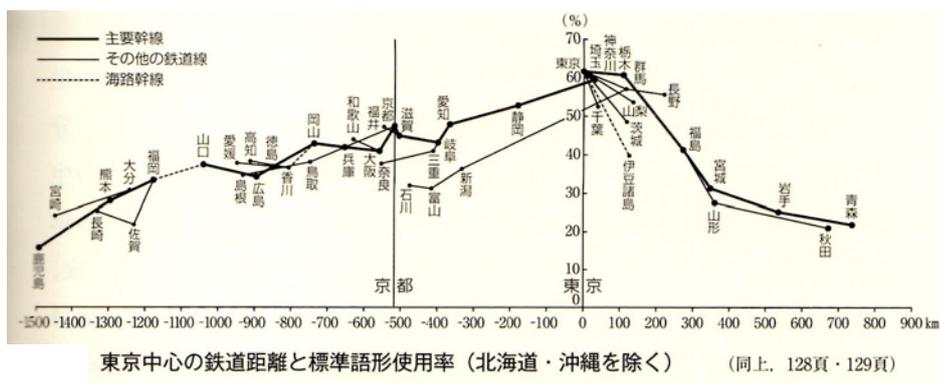
木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 『方言学入門』(三省堂 2013年 p.77)

<sup>11</sup> 井上史雄『変わる方言動く標準語』(筑摩書房 2007年 p.37)

<sup>12</sup> 同上 (p.38)

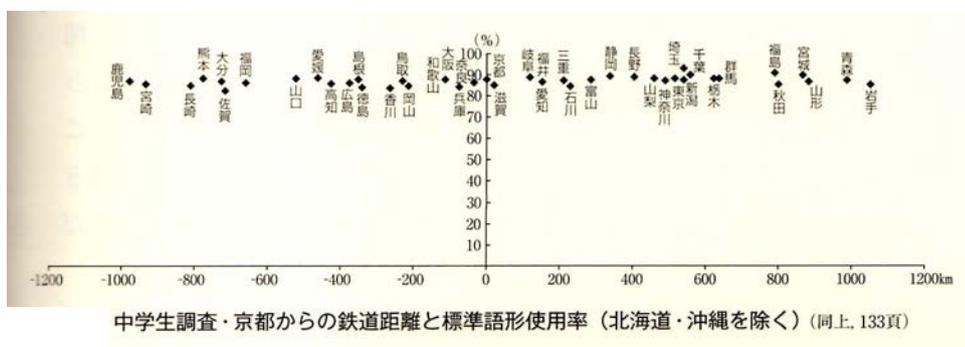
<sup>13</sup> Linguistic Atlas of Japan の略称

図 4



木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 『方言学入門』（三省堂 2013年 p.77）

図 5



木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 『方言学入門』（三省堂 2013年 p.77）

#### IV 人々の方言に対する意識の変化

##### (1) プラスになった方言イメージ

地方から東京へ出てきた人が、自分のことばを笑われて、自分の方言に劣等感を抱き、口を利かなくなるということがあったらしい。また、III章で標準語・共通語化の歴史についてふれた通り、過去には方言を撲滅しようという動きがあった。明治以来の標準語教育が、人々の意識の中に方言コンプレックス<sup>14</sup>を生み出した。しかし、これはもう昔のはなしである。1970年代までは方言の受け止め方は否定的であったが、1980年代を転換点として、方言は社会的価値があるものとして受け止められるようになってきた。また、1990年代・2000年代と近代に近づくにつれ、方言には「楽しい」「かわいい」「癒やし」といった価値も加えられてきた。実際、2000年代に入ってから、「女子高生方言ブーム<sup>15</sup>」というものが観察された。さらに、方言CMが「楽しい」「おしゃれ」なものとして話題を集めた。図6は私が2015年の8月に福島で購入した「東北弁トランプ」である。地域の方言をお土産に取り入れていることから、地元の人々の方言を大切に、のこしたいという気持ちが反映されていると思う。このように人々の方言に社会的価値を見いだす感覚が日本社会に浸透してきたのである。

<sup>14</sup> 柴田武『日本の方言』（岩波書店 1958年 p.89）

<sup>15</sup> 田中ゆかり『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』（岩波書店 2011年 p.65）

## (2) 地域資源としての方言

(1) 節で方言が社会的価値があるものとして受けとめられるようになってきたととりあげたが、それにより地方の側からも、積極的に方言を用いて外部にアピールするようになってきた。空港、駅、バスなどの公共交通機関や観光客の集まる土産物屋には、歓迎あいさつ方言<sup>16</sup>を掲げた看板やポスターが多く見受けられる。また、2011年、山口国体のマスコットとして活躍し、現在は山口県PR本部長の「ちよるる」(図7)というキャラクターがいるが、この「ちよるる」という名前は、山口弁の会話の語尾に使われる「ちよる」をアレンジしたものである。秋田県では2014年開催の「第29回国民文化祭・あきた」では方言を「その土地らしさを身近に実感できる魅力的なもの」と位置づけ、外来者に「秋田らしさ」を感じてもらうために「方言によるおもてなし」を行った。このように、現代社会における方言が、「生活言語」から「イメージ創出言語<sup>17</sup>」へとその機能を変えつつある。

図6



筆者撮影 (8月18日)

図7



“ちよるるのプロフィール”

(8月18日アクセス)

<sup>16</sup> 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 『方言学入門』  
(三省堂 2013年 p104)

地方の方言で、「おこしやす」のように、「いらっしゃい」の意味を表す言葉の総称。

<sup>17</sup> 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 『方言学入門』  
(三省堂 2013年 p106)

地域らしさを感じるために用いられる方言のこと。

## V どのような方言が現在使われているのか

方言とは地域の生活に根づいた話しことばである。時代によって変化することから、社会の鏡のような存在であるともいわれる。その地域の歴史・暮らす人々の人柄を反映した温かいことばであると思う。しかし、現代では明らかに方言に接する機会が減ってきていると感じる。方言について調査するにあたって、群馬弁の話者である私の祖母(70代)・母(40代)・従兄弟(10代)に聞き取りを行った。すると、祖母は多くの方言を話していたが、従兄弟はほぼ標準語・共通語に近いことばを話していた。祖母は「トカゲ」を「カマギッチョ」と呼ぶが、母はそれを一度も聞いたことがなかった。一方で、群馬弁の「～なんさあ(～なんだよ)」「～なん?(～なの?)」といった文末の変化はどの世代でも使うようだ。同じ地域のことばを使う人々でも年齢によって話すことばに違いが生じている。ここで、方言は共通語とかけ離れているものは衰退し、共通語とわずかな変化しかないものは残るのではないかと考えた。

しかし、本当にそうなのだろうか。思い返してみれば、中学2年で岩手に農業体験に行ったときに農家の方が「捨てる」の意味で「なげる」と言っていたのを覚えている。共通語の「なげる」は「遠くへ放る」という意味があるが、それとは全く別の意味で岩手では使用されている。他にも、宮城県では「だから」を原因・理由を示す時ではなく、同意の時に「そうだよね」という意味で使われている。さらに、Ⅱの(1)でも紹介した東京の「硬い」という意味で使われる「こわい」というものもある。これらのように、共通語と同じ発音だが、全く別の意味で使われていることばが方言としてのこっている。よって、必ずしも共通語とかけ離れている方言が衰退するとは言えないようである。そして、今まで述べたことばに共通するのは“日常的に使う”ということだ。そのような日常的に使用することばというのはのこりやすいのではないかと考えた。

また、先ほど調査に協力してくれた従兄弟は自分が方言を話しているという自覚があり群馬弁の特徴も理解しており、その土地のことばを残した方がいいかを尋ねると、これからものこしたいし、のこすべきだと答えた。自分は方言を話すという自覚があれば自分の話すことばをのこしたいと思うのは当然のことのように思える。伝統的な方言がこれからのこっていくかどうかは、地域の人々の意識によるものでもあろう。

## VI これからの方言について

私はこれからも方言をのこしていくためには、小学生に対して方言に関する教育をするべきだと感じる。その教育というのは、英語の教育のように一つの科目として「方言」というものを作り、方言自体を教育するというものではなくて、総合学習や道徳の時間に地域の方言について触れて、ほかの地域にも自分の地域と同じように方言が存在するのだからお互いの方言を尊重し大切にすべきだと考えさせる道徳教育である。なぜ小学生の時期かというと、「5・6歳から13・14歳までの間にどこで育ったかということで個人の言語的運命は決定する」と言われているからである<sup>18</sup>。その言語形成期に自分の地域の方言に少しでも触れることによってその後の生活の中で方言を身近に感じ、方言について考える機会が増えると思う。学校教育の普及やマス・メディアの発達により標準語・共通語が全国に広まった今、教育されるべきなのは標準語・共通語よりも方言である。Ⅳ章で方言に対するイメージはプラスになっているととりあげたが、方言がプラスに考えられるようになった今だからこそ、そのような教育が行われるべきなのではないかと思う。後世にたくさんの魅力ある方言をのこすべきだ。

最近では方言のイメージがプラスになり、本来の生活に根付いた話しことばという使われ方以外でも使用されている。東京で暮らす私たちは普段耳にしないが、各地にはまだ根強くのこっているということが調査により分かった。方言を話す人びとが自分の話す方言をしっかりと理解し、大切にしていけば、方言が絶滅するということはない。

## VII おわりに・感想

私は方言学についてこれまで研究をしたことがなかったため、方言のアクセントや場面による変化などの詳細は論じることができなかった。また、自分の足で様々な地域の方言を調べに行き、生の方言に接するということができなかった。以上の2点については今後の課題である。方言学というのはこれから変化が起こるかもしれない興味深い分野であると感じた。

先日私が乗った電車にいた2人のおばあさんの会話が耳に入った。彼女らは東府中駅のことを“シガシ”府中と言っていた。“ヒ”が“シ”に変わるのは江戸弁の発音だ。耳を澄ませてみれば、方言は身の回りから聞こえてくるかもしれない。これからも方言を意識しながら、社会の変化と共に方言の今後のあり方をしっかりと見つめていきたいと思う。

---

<sup>18</sup> 柴田武『日本の方言』（岩波書店 1958年 p.168）

## 【参考文献】

- ・柴田武『日本の方言』（岩波書店, 1958年）
- ・井上史雄『変わる方言動く標準語』（筑摩書房, 2007年）
- ・真田真治『方言の日本地図』（講談社, 2002年）
- ・真田真治『方言は絶滅するのか 自分のことばを失った日本人』（PHP新書, 2001年）
- ・徳川宗賢『日本の方言地図』（中央公論社, 1979年）
- ・木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 『方言学入門』（三省堂, 2013年）
- ・平井英次『多摩の方言と随想 第一編』（武蔵書房, 1978年）
- ・飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一『講座方言学 4 -北海道・東北地方の方言-』（国書刊行会, 1982年）
- ・堀井令以知『大阪ことば辞典』（東京堂出版, 1995年）
- ・田中ゆかり『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』（岩波書店, 2011年）
- ・塩原慎次朗『アナウンサーの日本語講座改訂版』（創拓社出版, 2013年）
- ・“ああああおもりっていいなあとつぶやいてしまう本” 政策・青森県企画制作部企画調整課  
(<http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kikaku/chikatsu/files/aomori-iina.pdf>)  
2016年8月11日アクセス
- ・“ちよるるのプロフィール”  
(<http://choruru.jp/profile>)  
2016年8月18日アクセス
- ・“宮城県あるある「だから」は同意だからね！”  
(<http://www.tnews.jp/entries/2361>)  
2016年10月10日アクセス